

第 29 回

第 4 章 現代を生きる人間の倫理

人格の尊厳
～カントの思想～

今回学ぶこと

西洋近代を代表するドイツの哲学者カントの道徳思想を学習し、人間にとって真の自由とは何かを考える。それを通して、カントの説いた「人格」について理解し、人間の尊厳について考えを深める。また、カントの「目的の国」について考えるとともに、人類の永遠平和や、望ましい社会のあり方についての思索を深める。



講師
小林和久

今回のキーワード！

カント／道徳法則／自律／人格／目的の国／永遠平和

自律としての自由

今日、自由という言葉は、「心のままであること」、「思い通り」などの意味で使われることが多い。しかし、18 世紀ドイツの哲学者カントは、人間ならば誰でもいつでも、守らなければならない道徳的な義務の法則（道徳法則）に、自らの意志で従うことこそ、真の自由だと考える。

つまり、自分の損得や利害を考えることなしに、しかも、他人に命令されるのではなく、自分自身の意志で、道徳的に行動する「意志の自律」を、人間にとっての自由だと考えた。このとき、人間がなすべきことを命令する道徳法則を立てる理性のことを、カントは「実践理性」とよんだ。

人間だけがもつ実践理性を使って、自ら道徳法則を立て、その命令に従って、自らを律して生きる…、これがカントの考えた「自律としての自由」であり、わたしたちの善い行為とは、このような過程で行われるものだと考えられた。

人格の尊厳

人間は人間であるかぎり尊いという考え方を、カントはルソーが書いた『エミール』という本から学ぶ。では、そのような考え方の根拠、つまり、人間の尊厳の根拠はどこにあるのだろうか？

カントはその根拠を、「人格」に求める。「人格」とは、自らの意志で道徳的に生きるという自律の力を持つ存在であり、人間が尊いのは、この人格をもつからである、とカントは考えた。したがって、人間は人格として、自分のことも他人のことも手段としてのみ扱ってはならず、常に同時に、目的として扱わなくてはいけない、ということを、カントは道徳法則の1つと考えた。この考えは、現代でも、人間尊重の精神や、人道主義のよりどころにもなっている。

永遠平和のために

カントは、人間が互いの人格を目的として尊重しあう社会を理想として、それを「目的の国」とよぶ。そして、国際社会では国家同士が互いを人格として扱っていけば、戦争のない永遠平和が実現されると考える。

この永遠平和という理想の実現に向けて、国々がもつ常設の軍隊をなくしていったり、国内の体制を民主主義にしたり、各国が共通して守る国際法を制定したり、世界の国々が連合できる国際平和機関を設立したりしなければならない、などの考えを提唱した。

このようなカントの考えは、国際連盟や国際連合の原理ともなった。

Kobavashi ...コラム

わたしが世界をつくる？

カントは「わたしは何を知ることができるか？」をテーマに、難解な本である『純粋理性批判』を記します。わたしたちは普通、何かを知る（認識する）とき、外部の対象（客観）をそのままわたしたちの頭（主観）がコピーしている、と考えがちです。しかし、カントはそんな考え方を逆転させます。もともとわたしたちの頭の中に、経験したものを秩序づける形式（カテゴリー）が備わっていて、それが外部の対象を整理することで、「わたしたちは物事を認識している」と考えます。

例えば、舌を火傷したりして味覚が麻痺していたら、どんなに「美味しい」と評判の食べ物でも、その「美味しさ」を知ることはできません。つまり、「認識（主観）が対象（客観）に従う」という考え方を、カントは「対象（客観）が認識（主観）に従う」という考え方に逆転させるのです。

こう考えると、主観（わたしの心）が世界を構成する、ということになります。ちょっと難しい考え方ですが、世界を楽しくするのも、つまらなくするのも、「自分の心次第」ということになるのではないのでしょうか。